

古書の愉しみ（令和三年五月）

土屋 博

一 「新撰年代記大全」中村柳雨編纂

（矢嶋誠進堂發兌、明治三十四年刊、九〇丁）

和綴。緒言に曰く、「本書は我邦古今の沿革を一目瞭然ならしむる爲の開國以來現今に至る経過年数は固より其の年間に生じたる重要な事變を摘載せる年歴表なり」と。情報量は多く、豆粒ほどの大きさの字にて詳細に然も読み易く記述せらる。

また、改めて日本の木版印刷技術の高さを思ひ知らさる。

神武天皇より皇極天皇までは、一頁に六つの升目とし、各天皇の時代の事蹟を記録す。孝徳天皇の大化元年以降は、一頁に二十五の升目とし、各年の事蹟を記録す。

明治以降は上下段に分け、それぞれ一年分とす。

冒頭は神武帝紀元々年、「元年帝大和橿原の宮に即位す。是より先き丙寅の年東征の師を起し戊午長隨彦と戦ひ利あらず皇兄五瀬命戦歿す」と。大化元年については、「年號の始め、蝦夷入鹿を誅す、封建を廢し郡縣とす、三韓入貢す」とあり。明治三十四年最後の頁には、「佛國巴里留學中の軍醫中監矢部辰次郎氏は結核免疫研究第一報告を全國醫學會院に提出して懸賞奨學金五百法の贈與を受く」とあり。先人の病ひの研究に思ひを馳せたり。

二 「日記文範」大和田建樹編

（博文館、明治四十年刊、定價金三拾五錢、三〇〇頁）

本居宣長の「菅笠日記」・「春の錦」、香川景樹の「文化二年日記」・「待たぬ青葉」・「中空日記」、萩原廣道の「水蓼」、賀茂真淵の「岡部日記」、藤原家長の「家長日記」、藤原道綱母の「蜻蛉日記」、中島廣足の「忘れがたみ」、椿仲輔の「小木曾日記」、加藤千蔭の「香取日記」、清水濱臣の「うたかたの日記」より、村田春海の「椿詣の記」、大江丸舊の「あがたの三月四月」まで。

綺羅星の如き國文の美しさは格別と覺ゆ。今やこれを繼承する人無きを惜しむのみ。

三 千代田文庫「山陽遺稿 詩」

（千代田書房、明治四十四年刊、正價金二拾錢、二一八頁）

縦十四・七センチ、横九センチと今日の文庫本より一回り小さく、携帯に便利。

冒頭は丙戌元日の「曙光明暗動窻攏。曆入新年微雨中。」以下略。

四 「聖賢格言集」福田重政纂述

（梁江堂書店、明治四十五年刊、定價金六十五錢、三三六頁）

杉浦重剛文學博士序、大町桂月先生總評。

大町桂月先生總評に曰く、「伊藤公十六歳の時長州藩の戊卒となりて相模の濱邊に野營同様の生活をなしけるが、先輩に來原良藏といふ豪傑あり。公の教へ甲斐ある人物なることを識り、熱心深切に公に讀書を授けたり。冬季毎朝午前四時頃騎馬提灯を携へて公の小屋へ來り、熟睡せる公を叩き起し、蠟燭の光にて公に詩經書協を教へたり」と。

本書には、五十音順に、「惡小を以て之れを爲すこと勿れ」（蜀昭烈帝）より「終りを慎むこと始めの如くせば則ち敗事無し」（老子）に至る聖賢格言、詳らかに解説せられ、昔の教育を追體驗することを得。

五「孔子の聖訓」公爵二條基弘・伯爵東久世通喜共著

（金尾文潤堂、明治四十三年刊、金八十錢、本文三三九頁）

三方金。自序に曰く、「聖上嘗て儒臣に諭して曰く、彝（い）倫道德は教育の主本なり、方今學科多端、本末を誤るもの鮮からず、年少就學、最も當に忠孝を本とし、仁義を先にすべしと」。目次は、孝經、易經、中庸、大學、論語、家語、禮記、孔叢子。

冒頭の孔夫子略傳は要領よく纏められ、「孔子は三歳にして父を失ひたり、五六歳の頃より嬉戲するにも俎豆を陳ね、禮容を設け、無益なることに時間を費消せず、十五歳の時より學問に志したりき」とあり、「無益なることに時間を費消せず」は、特に學ぶべき教へなり。

六「先哲遺著漢籍國字解全書第一卷 孝經、大學、中庸、論語」

（早稻田大學出版部、明治四十五年刊、五一頁十六二頁十九八頁十三九一頁）

このシリーズは、漢學隆盛時代に於ける老大家の講義録のうち、最も優秀なるものを抜きて網羅したるものなり。孝經については熊澤蕃山（一六一九年生、一六九一年歿）、大學・中庸・論語については中村惕齋（てきさい。一六二九年生、一七〇二年歿）の講述なり。

中村惕齋は伊藤仁齋と其の盛名を齋しうし、先儒を非毀するを忌み、博を誇らず。

七「先哲遺著漢籍國字解全書第十卷

（早稻田大學出版部、明治四十三年刊、三五〇頁十三七七頁）

孫子については荻生徂來、唐詩選については服部南郭の講述なり。

南郭の「唐詩選國字解」は別途平凡社より東洋文庫三冊として復刻せられ居る處、「江戸時代のベストセラー、口述なれば語り口の妙樂し」と宣傳せらる。

八「官公吏必携 書翰と式辭」鈴木魅編

（丁未出版社、大正五年四版、定價八拾錢、二五〇頁）

大藏大臣武富時敏題字は「達意」なる字。

目次は、第一篇書翰文に就て、第二篇儀式文に就て、第三篇作例（新任、歡迎、轉勤、送別、出張、招待、祝賀、慰問、哀悼、祭典、紹介、問合、謝禮、謝絶、退職）。

就任の挨拶状の例、以下の如し。「拜啓 時下愈御清穆奉賀候然者小生今般東京府知事拜命
昨十五日著任致候就ては將來公私共御懇情を蒙り度奉願候右不取敢御挨拶申上度如此御座
候 敬具」。

(令和三年五月九日受附)